

学校教育高度化センター後援事業

Michael Bamberg客員教授の活動

報告者 能智 正博（教育学研究科 教授）

滞在時期 2013年7月1日～7月31日

はじめに

心理学や社会学、教育学等の分野で、従来の伝統的な視点から距離をとって新たな仮説生成を目指して発展しつつある研究アプローチとして、質的研究がある。これは、データ収集・分析・知見の発表において数量的な表現に頼るのではなく、言語を中心とした質的データを重視していこうとする研究の総称である。従来、自然科学的な実証性を重視していた心理学においてすら、ここ10年ほどの間で質的研究への関心は急速に高まっている。たとえば、2012年に出版されたアメリカ心理学会の“*Handbook of Research Methods in Psychology*”では、質的研究にかなりのページ数が割かれ、正統な心理学方法論の一部として解説されている。我が国においても、グラウンデッド・セオリー等のカテゴリー分析の方法が、質的研究を行う際のオーソドックスな手続きの1つとして広く知られつつある。しかしその一方で、グラウンデッド・セオリー等が質的研究のドミナントな視点のようになって、研究の方向を拘束したり方法を画一化したりするという逆説、あるいはそこから来る不自由さの感覚も生まれているように思われる。

こうした状況のもと望まれるのは、研究の基本に立ち戻り、対象フィールドとじっくりつきあってそこから得られたデータを丁寧に読み込んでいく作業であるかもしれない。そこで注目されるのは、質的データの言語的な側面に対する注意を喚起し、その生成の現場における意味の構築に焦点を絞って分析する「シークエンス分析」の視点である。その一部であるナラティブ分析やディスコース分析では、形式的な手続きの段階的な連鎖としては示しにくい分析アプローチが工夫され、具体的な質的研究に生かさ

れつつある。

今回招聘したマイケル・バンバーク教授は、心理学領域におけるナラティブ（語り）とディスコース（言説）研究、およびその分析法の第一人者であり、国際学術誌“*Narrative Inquiry*”の編集主幹としても長年活躍している。彼の提唱する「スモール・ストーリーの分析」は発話データの細かな読みと解釈の積み重ねを特徴としており、そこには現在の質的研究が迷い込んでいる袋小路を抜けるヒントが含まれていると考えられる。

今回の滞在においてバンバーク教授は、ナラティブ分析の教育と普及を1つの目的とし、レクチャー、シンポジウム、大学院生の個別指導といった形で、本研究科の教育・研究の発展に多岐にわたって貢献をしてくださった。以下ではその活動の一端を簡単に紹介する。

ナラティブ分析の教育

主たる活動の1つは、臨床心理学コース大学院の授業「臨床心理学研究法特論Ⅰ」における、3回にわたるナラティブ分析のワークショップであった。教育学研究科の複数のコースからの受講者は、必ずしも質的研究の経験がある者ばかりではなかったが、ヴィジュアルを多用した講義と具体的なデータを用いた実習を通じて、ナラティブ分析に関する多様な側面の学びが可能となった。

より具体的には、第1回目（2013年7月1日（月））として、質的な分析の基礎として京都駅の雑踏を撮影した自然なやりとり場面の検討から入り、現象の不透明性と解釈の不可避性について議論した上で、時系列的な観察の反復による妥当化の方法が示唆された。次いで第2回目の授業（7月8日（月））では、一人の女性の二

度にわたる自己語りが授業内で検討され、その語り内容や語り口についての分析が行われた。全く同じエピソードの語りに見られた差異を解釈していくなかで、語り直しを通じて語り手自身が変容していく可能性が指摘された。第3回（7月22日（月））においては、複数の小学生の子どもが異性について自由にやりとりするビデオとそのトランスクリプトを素材に、そこでの相互作用のなかで、彼らそれぞれに独自の性的なアイデンティティが構築されていく過程が分析された。

ナラティブ研究の事例

また、バンバーグ教授は教育学部授業「質的心理学研究法」のゲストスピーカーとして、7月12日（金）にナラティブ研究の事例を紹介してくださいました。受講者は教育学部の3、4年生が中心だったが、大学院生も参加して熱心に耳を傾けた。内容は教授のもっとも最近の研究をもとにしたもので、タイトルは“Public apologizing: The practice of authenticity”であった。そこでは、公的な謝罪がいかにより誠実さのイメージを作り上げる方向で構築されているか（あるいは構築に失敗しているか）が分析された。

データとして用いられたのは、スキャンダルを起こした著名人がTV番組やニュースで謝罪した場面であった。映像と語りの両方が分析対象とされ、その共通要素とバリエーションが取り出された。謝罪の後に人望が回復したと考えられる事例では、しばしば、責任を引き受けつつその時期の自分を現在から切り離したり、後悔を暗示する身体表現を要所要所に差し挟んだりするストラテジーが用いられていた。そのストラテジーは、自分とはどういう人間かを構築する主体のアイデンティティ・ワークでもあった。謝罪場面に限らず誰もがアイデンティティ・ジレンマ（自分は他者と同じ／違う、世界との関係で主体的／受動的、時間経過のなかで一貫／変容）を体験しているというが、そのジレンマを適切に泳ぎきろうとする個人の努力がそこに浮かび上がってきた。

ナラティブ分析の多様性と評価

今回の滞在も終わりに近づいた7月27日（土）、午後2時から5時まで本研究科第一会議室にて、「心理学におけるナラティブ分析の可能性」というテーマでのシンポジウムが行われた。当日は、学内外の大学院生や研究者を中心に、約40名の聴衆が集まった。まずオープニングとしてバンバーグ教授より、“Discourse and narrative in qualitative inquiry”というタイトルのレクチャーが行われた。このなかでは、なぜ今「質的研究」なのか、なぜ「ディスコースやナラティブ」が注目されるのかという経緯の整理から始まって、ディスコースとそれを作る人間の二重性（たとえば現実を反映すると同時に現実を作り上げるといった二重性）が指摘された。その上で、ディスコースとナラティブがアイデンティティ構築のための場として位置づけられ、その分析の方法としてポジショニング分析が紹介された。

このレクチャーを受けとって、3人の本研究科所属の院生・研究生が自分の行っているナラティブ研究の紹介を行った。発表者とそのタイトルは以下の通りである。

- ・松尾純子「物語としての原爆体験」
 - ・橋本望「自死遺族の語り口の分析」
 - ・北村篤司「『非行』と向き合う親たちのセルフヘルプ・グループにおける語りの構築」
- 研究発表の後、ディスコース分析を専門とする大橋靖史教授（淑徳大学）からコメントをいただいた。最後にバンバーグ教授が再び登壇し、各研究の評価とナラティブ研究としての可能性についての議論と質疑応答が行われた。

バンバーグ教授のアプローチの意義

近年、ナラティブは人の認知や行為を理解するキー・コンセプトとして、多くの心理学研究者から関心を寄せられている。しかしそこで捉えられているナラティブはしばしば限定的であり、「始め—中間—終わり」といった構造をもつ1つのまとまりとして意識されることが多い。そこで注目されるのは、その繋がりを通じて創発される意味であるのだが、初めから完結したつながりがあって、それが言葉にコピーされ表

出されるというわけではない。まだ生成途上のナラティブは、まだ明瞭な形をとらず、ディスコースの一部として片鱗を示すだけかもしれない。また、その創発の過程は単に個人内のそれとして理解し尽くせるものではなく、具体的な語りの状況・文脈のなかで、様々なレベルのやりとりを伴って生成される。こうした場合、ナラティブは断片的に現れるだろうし、いっそう相互作用的なものとして捉えていく必要があるだろう。ナラティブの分析とは、そうした語りの過程のダイナミズムを視野に入れた分析であることが望まれる。

バンバーク教授のナラティブ分析は、そのように生きた文脈のなかで生成するナラティブを総体として捉えようとする1つの試みである。詳細に述べることはできないが、そこで提唱されるポジショニング分析の3層構造、つまり、ナラティブの内容の分析、やりとりのなかでの生成の分析、構築されるアイデンティティの分析は、ナラティブ分析をさらに精緻化し、豊かな成果を生み出すための切り口として非常に刺激的なものである。